

2009年7月9日(木) 18:00~20:30

会場/リクルートGINZA7ビル セミナールーム  
会期/2009年7月6日(月)~7月30日(木)



抜群のセンスに、審査員5人中4人が票を投じて、初代グランプリが決定!

### GRAND PRIZE

我喜屋位 瑛務 Isamu Gakiya

### JUDGES

- 小阪 淳 (美術家)
- 佐野 研二郎 (アートディレクター)
- 服部 一成 (アートディレクター)
- 平林 奈緒美 (アートディレクター)
- ヒロ 杉山 (アートディレクター)

進行: 大迫 修三 / リクルートクリエイティブセンター  
クリエイティブディレクター

<敬称略>



#### ■出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

**トヨクラタケル Takeru Toyokura**

例えば、カッコいいけど、ちょっとダサイ。可愛いけど、毒がある。そんなプラスとマイナスのイメージが同居しているものに興味がある。この作品にも可愛いけど、ちょっと怖いといった二つのイメージを込めることで「新しい何か」を創り出したいと思った。

<質疑応答>

- 小阪: タイトルの「子どもおひばり152」の意味は?
- トヨクラ: 極力意味がわからない造語にし、自分の作品の通し番号を入れた。
- ヒロ: なぜフェルトを使ったのか?
- トヨクラ: やわらかいイメージを出したかった。
- 佐野: フェルトの造形物は何個ある?
- トヨクラ: 1200個くらい。制作期間は3か月ほど。

**我喜屋位 瑛務 Isamu Gakiya**

作品のストーリーやコラージュには一貫して狂気を描いている。それだけでは怖くなるので、そこにユーモア的な要素を入れて見る人が笑えるような作品を意図した。今回の展示は約1年描きためた絵をフライヤーのように壁一面に貼りめぐらせた。

<質疑応答>

- ヒロ: 現在イラストレーションの仕事をしているのか?
- 我喜屋: あまりやっていないが、将来はやっていきたい。
- 佐野: 紙のサイズがバラバラだが?
- 我喜屋: 切れ端を使ったり、特に決めてない。
- ヒロ: 背景が網点のおじさんのキャラクターの作品はシルク印刷?
- 我喜屋: 網点はビニールシートにドリルで穴を開けて、ステンシルで描いた。

**松上 剛 Takeshi Matsugami**

擦れや汚れ、塗り残しなどによってできる形・線の不完全さ、塗り重ねや貼り重ねによって生じるマチエールや厚みに興味を持って作品を制作している。今回はコラージュした作品を4点展示した。個展では、コラージュ以外のペインティング作品も展示したい。

<質疑応答>

- ヒロ: このコラージュは顔? なにか意味があるの?
- 松上: 最初は自画像だったが、脱線し深い意味はない。
- 大迫: 以前「ひとつぼ展」に出品した作品とガラリと印象が変わった?
- 松上: 以前はイラストレーションだったが、会社を辞めて作品作り専念している中で変わっていった。
- 佐野: タイトルの「CHANNEL」とは?
- 松上: パツキのある作品をまとめる際にこれをチャンネルを変えるようにしてもらいたくて。

**橋内 光則 Mitsunori Kitsunai**

作品づくりを通して、あわよくばモチたいというところからスタートしている。女性をモチーフにしたのは、いい感じに女性を描けたらモチるのではという思いから。今まであまりモチなかったが、ファイナリストに選んでもらったので、今回はイけるかもしれない(笑)。

<質疑応答>

- ヒロ: これは油絵? モチーフの女性はここで展示されていることを知っているの?
- 橋内: 他の画材は自分には合わなくて油絵を描いている。彼女は描かれていることは知っているが、展示のことは知らない。
- 服部: 絵の元になっている写真は描く前提で撮っているの?
- 橋内: 作品に使えるかもしれないという程度で撮っている。普段のスナップ写真的なものをモチーフにしている。

**ナガバサヨ Sayo Nagaba**

モノを見ていて視線が自然に横に流れるものや広がる形に興味がある。その構造には必ずある一定のリズムが潜んでいる。これを描き写そうとする時にある法則を見つけられることができれば、新しい表現になると思う。今回はピアノの鍵盤をモチーフに、それに挑戦した。

<質疑応答>

- 平林: 数種類の紙に描いているのはなぜ?
- ナガバ: 紙によって色の出方が違うので選んでいる。チラシの裏に描いたものは日常的に描いているもの。
- 服部: 最初に全体像があるのか、描いていくうちに決まるのか?
- ナガバ: 横に伸びるイメージを描いていった結果が作品になる。

**高松 徳男 Norio Takamatsu**

頭が悪いイクメンの父と、顔は普通だが頭のいい母から生まれた自分は性格が分裂している。だから、描く絵にも一貫性がなく分裂的でつかみどころがない。個展プランはニューペインティング的な大きな絵を描いて展示したい。

<質疑応答>

- 小阪: いくつかの作品に描かれているシルバーの造形物は何?
- 高松: 口紅ケースの金属部分。切り抜きをコラージュしたものもあるし、自分で描いたものもある。
- 服部: 自分がカッコいいと思うものを描いているの?
- 高松: 奈良にいた頃は日本のものが好きだったが、東京に出てきてカッコイイと思うものいっぱい出てきて、それが刺激になって描いている。

### ■審査員の感想

出品者6人のプレゼンテーションが終わり、進行役の大迫さんが各審査員に「1\_WALL」に変わった感想を聞いた。小阪さん:「ポートフォリオレビューは体力勝負だった。出品者が何を作りたいのかよく分かって勉強になった」。ヒロさん:「30人と面談して、とても疲れた感があった。ただ、作品だけでは伝わらないものが、本人の話を聞くことで分かることもあり、ポートフォリオが違って見えてきた」。佐野さん:「今回は「1\_WALL」のネーミングやロゴの制作から関わっている。審査はかなりヘビーなプロセスだったが、とても刺激を受けた。壁全面の展示に迫りも感じた」。服部さん:「すごく長い審査だった。最終的に残る6人というの、ちょうど良い人数だと思う。今日、展示会場に最初に入った印象は良かった」。平林さん:「最終的に6人を選ぶポートフォリオレビューはヘビーなプロセスだった。審査は難航したが面白い経験だった」。

ここで大迫さんが「出品者一人ひとりに対する感想を聞いていきましょう」と進行。まず、トヨクラさんの作品について。佐野さんが「平面の作品も知っているが、今回の作品が一番良い。フェルトの形も作為的ではないし、影もきれいな」と評価する。平林さんが「想像していた通りの作品でサプライズがあった」と残念がり、小阪さんも「フェルトを吊るした展示の天井部分に何か仕掛けがあるのかと思ったが、何もなかった」と物足りない様子。「本人がプレゼンテーションで言っていた専気を感じられず、フェルトのシルエットが普通のメルヘンに見えてしまう」とは服部さん。

松上さんの作品について。ヒロさんが「世界観としては好きな作品だが、ポートフォリオの中にあつた別の作品のほうが惹かれるものがあった。4点に絞った展示が足りなかった」と言えば、佐野さんも「モチーフもシンプルだし、ただテクスチャーに見えてパワーが伝わってこなかった」と同意見。しかし小阪さんは「顔というモチーフには意味がない。そのぶんテクスチャーにこだわったところが逆にインパクトがあった」と面白がる。

ナガバさんの作品について。「もっと柔らかい布のようなものをイメージしていたが、画用紙などの厚い紙に描いていたのは意外だった。ドローイングも力強かった」とヒロさんが言えば、「色の感じとか立ち止まって見てしまった。きれいだけど、見ていると不安になる感じが、好きなトーン」とは平林さん。服部さんは「ポートフォリオから良いと思っただけ。展示作品も何か似ていないところが良い。プレゼンテーションも筋が通っていた」と好印象。小阪さんは「ピアノというモチーフを再構成した作品は展示として面白かった」と評価する。

我喜屋さんの作品について。「イラストレーションはうまいし、センスもあるし、今回の出品者の中では一番完成度が高い」とヒロさんがべた褒めすれば、佐野さんも「インスタレーションとしてのアートディレクションにまとまりがあり、人が見ることを意識した展示全体の完成度も高い」と同調。小阪さんは「うまい作品だけど、新しい感はない。この「1\_WALL」で選ぶべき作品かどうかを考えたい」と慎重な意見。平林さんも「クオリティも一番だし、自分の中ではベスト3に入る作品。だけど、個展を一番見てみたいと言われれば違う」と判断に迷う。

橋内さんの作品について。平林さんが「うまい絵。会場全部を使って描かせてみたい」と言えば、佐野さんは「5点の展示だけではちょっとさびしい感じがした」と印象を語る。「女の子をもっと書き込んでも良いかなと思った。女の子で押し通せば良かったかも」とはヒロさん。「母の子をもっと書き込んでも良かったのでは」と小阪さんも同じ視点からアドバイス。

最後に高松さんの作品について。服部さんが「カッコよさをさかんにプレゼンテーションで言っていたところが良かった。アクリルの質感も良い。絵のテクニックは決して上手ではないが、それがかえって良かった」と不思議な魅力を語れば、ヒロさんも「つかみどころがないが、不思議なざわざわ感を感じた」と褒める。佐野さんは「完成されていない魅力というのは、あいまいにも見える。とらえどころがなさ過ぎる感じもある」と困惑気味。平林さんは「出品者の中で他の人にはない不思議な魅力がある」と言えば、小阪さんは「もうなるなりでやっているようにも見える」と手厳しい。

### ■審査員による投票

審査員4名、各審査員に2名ずつ推薦者を挙げてもらう。その結果は……

小阪/ナガバ	我喜屋
佐野/ナガバ	我喜屋
服部/ナガバ	高松
平林/ナガバ	我喜屋
ヒロ/我喜屋	高松

これを集計すると、ナガバ4票/我喜屋4票/高松2票

「ナガバさんと我喜屋さんが4票で並びました」と大迫さんが進行し、この二人で決選投票をするか、誰か応援演説をする人はいないかを確認する。ここで小阪さんが「この二人の作品は抽象と具象、現代美術とイラストレーションといえば両極にあると思う。どちらを選ぶかは難しい」と言えば、他の審査員も「1\_WALL」の初代グランプリを決めるとあって慎重になる。満を持して大迫さんが「では、審査員のみならず、いいですか。二人のどちらかに入れてください」と拳手を求める。そして拳手の結果は、ナガバさんを推したのが服部さん一人。一方、他の4人は我喜屋さんを推し、グランプリが決まった。「1\_WALL」初代グランプリは我喜屋さんと大迫さんが高らかに宣言し、会場からひととき大きな拍手が起こった。グランプリに選ばれた我喜屋さんには、審査員の佐野さんがデザインしたトロフィーを手渡す、再び会場が沸いた。我喜屋さんが「ありがとうございます。グランプリを獲れると思っていなかったもので、うれいので、うれしいです。今回の「1\_WALL」をステップに、大きく飛躍していきたいです」と挨拶して公開二次審査会を締めくくった。

### ■出品者インタビュー

トヨクラさん:「楽しかったです。いろいろと勉強になりました。ポートフォリオレビューで審査員の方と一緒に面談する機会があり、貴重な話を聞けたのが良かったですね。今後はもっと自分を磨いていきたいです」。

松上さん:「褒れました。自分の作品については気に入っています。「1\_WALL」は良い試みだと思うので、もっと続けていってほしいと思いますね」。

ナガバさん:「ひとつぼ展」にも出品したんですが、今回は壁面が大きくなったので張り度合いが違って感じました。4票も入れてもらったので、うれしかったです。グランプリ決選の時はドキドキして期待したけど、それだけでうれしかったし、これでまだ活動を続けてもいいんだなと思いました」。

我喜屋さん:「グランプリ受賞はまったく思っていませんでした。審査ではうれしいことをたくさん言ってもらいました。公開審査というプロセスにドキドキしながら、一方で楽しんでいました。記念すべき「1\_WALL」の第1回目のグランプリなので、この名を汚さないようにこれからも作品制作に精を出して行きたいですね。まずは今回の延長で来年の個展を頑張りたいと思います」。

橋内さん:「前回の「ひとつぼ展」では、プレゼンテーションでスベったので、今回それを改善できて良かったです。会場を沸かせられたということは、力がついた証拠ではないでしょうか。ありがとうございます」。

高松さん:「グランプリを獲りたかったけど、今回は獲らなかったことで自分の今後のモチベーションは上がると思います。やっぱり、お笑いが最高のアートだと思うので、プレゼンテーションで会場を沸かせられたのは良かったです」。

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>